

令和3年度薬学教育自己点検・評価結果

(1) 令和3年度卒業時アンケートの集計データ分析

薬学部においては、学生の卒業に際し、4年間又は6年間の薬学教育をとおして、自身が身に付けることができた知識、技能及び能力について、アンケート形式で自己評価をしてもらい、アンケート結果は、薬学科（表1-1）と創薬科学科（表1-2）を区別して集計した。

なお、アンケートでは学生に、「1：十分身に付けることができた」、「2：ある程度身に付けることができた」、「3：あまり身に付けることができなかった」、「4：全く身に付けることができなかった」の4つの選択肢から1つを選んでもらうこととしており、薬学教育自己点検・評価においては、1及び2の選択肢を選んだ場合「身に付けることができた」、3及び4の選択肢を選んだ場合は「身に付けることができなかった」として判断した。

<1. 全学共通項目（表1-1、表1-2、図1、図2）>

薬学科の学生（表1-1、図1）については、1）～3）、8）、9）の項目について、80%以上が「身に付けることができた」と評価しており、これらの項目の達成満足度が高い一方、4）「口頭発表、説明、討論などのプレゼンテーション能力」と、7）の「教養教育等による幅広い知識」について「身に付けることができた」と評価しているのは、それぞれ68.3%と58.6%にとどまり、やや満足度が低く表れていた。これは、令和3年度においても令和2年度に引き続きコロナ禍により教育手法が制限されていたことも影響していると考えられる。また、これまで同様、5）「母語以外の外国語（英語など）の語学力（聞く、話す、読む、書く）」と、6）「国際的な視点で考えることや国際的な感覚」の2項目については、他の項目と比較して満足度が低く表れているものの、5）に関しては昨年度と比較して、「身に付けることができた」と評価した割合が7.2%上昇しており回復傾向がみられる。この結果は、昨年度から卒業論文発表スライドを英語で作成する方針とするなど、英語能力の伸長を目指した各取組に関連するものであるのか、引き続き検討していく必要がある。

創薬科学科の学生（表1-2、図2）については、薬学科における結果と全体的な傾向は同様であり、昨年度と比較しおおよそ満足度の変化はないものの、5）「母語以外の外国語（英語など）の語学力（聞く、話す、読む、書く）」については、薬学科同様、昨年度から「身に付けることができた」と評価した割合が10.8%上昇しており回復傾向がみられた。また、7）「教養教育等による幅広い知識」では、昨年度と比較して「身に付けることができた」と評価した割合は4%の微増であるものの、その中で「1：十分に身に付けることができた」と評価した割合は15.2%上昇しており、大きな向上が見られた。令和4年3月卒業生が教養教育の五福一元化の開始と同時に入学した学生であることを踏まえ、この効果及び影響を注視していく必要がある。

＜2. 薬学部独自項目（表1-3、図3、図4）＞

卒業時アンケートにおいては、全学共通項目に加え、薬学部の各学科に特化した内容の項目について、学科別にアンケート調査を実施した。

薬学科では（表1-3、図3）、医療や薬剤師に関連する4項目の全てにおいて、「身に付けることができた」という評価が82.9%～90.3%を占めており、6年間の薬剤師養成教育は適切に実施され、学生の達成満足度も良好であることが窺えた。

創薬科学科では（表1-3、図4）、「創薬科学に関する幅広い学識と実験技術等を身につけることができたか」「本学の教育が今後の進路決定に役立ったか」との項目については、どちらも87.5%が「身に付けることができた」と評価しており、これらの項目の達成満足度は高い。また、「自然現象に対する知的好奇心・探求心を身につけることができたか」

「医薬品創出に取り組むために必要な創造的思考力を身につけることができたか」の項目について「身に付けることができた」と評価しているのは、それぞれ77.5%と70%であり、昨年度と比較して数値が上がっており、4年間の薬学研究養成教育が適切に実施され、学生の達成満足度も良好であることが窺えた。ただし、「医薬品創出に取り組むために必要な創造的思考力を身につけることができたか」の項目については、過去3年間の評価が70%前後を推移している。当該能力の修得のため、創薬科学科への専門コース制導入や卒業研究開始時期の前倒しなどの取組を開始しており、その効果を含めて引き続き注視する必要がある。

以上、令和3年度卒業時アンケート分析結果から、薬学科と創薬科学科ともに、学生達のディプロマ・ポリシー達成度は概ね適正な水準に到達しているものと評価した。ただし、薬学科においては昨年度と比較して「身に付けることができた」と肯定的な回答を選択する割合が全体的に減少している状況が窺えた。コロナ禍による教育手法の制限を含め、様々な要因を勘案しつつ、今後の推移を注視していく必要がある。また、語学教育やグローバル化対応教育については、ディプロマ・ポリシー達成度向上のための方策を、今後も継続的に検討していくことが必要である。

（2）令和3年度における修学状況データ分析

＜1. 学年別在籍状況（表2-1）＞

薬学科と創薬科学科の両方において、いずれの学年においてもストレート在籍率が84%以上となっており、例年と同様に、留年者等の過度な発生状況はない。

＜2. 学年別進級率（表2-2）＞

薬学科の令和3年度データでは、全学年において進級率95%以上と高水準となっていることから、休学・退学・留年者数は、適正な範囲内と判断される。その中でも4年次生の進級率においては、令和元年度4年次生の進級率が82%と低水準となっていることについて指摘があったが、令和3年度4年次生の進級率は98%と高水準まで改善しており、フォローアップが適正に行われたと考えられる。

創薬科学科についても令和3年度データでは、全学年において進級率が90%前後となっており、また平成29年度以降5年間に渡り同程度の水準が維持されていることから、休学・

退学・留年者数は、概ね適正な状況といえる。ただし、令和2年度1年次生及び令和3年度1年次生において、退学者は1名であるが、留年者が7名いることを踏まえ、原因の分析を行うとともに対応策について検討が必要と思われる。

＜3. 卒業状況（表2-3）＞

薬学科は、卒業率100%を平成27年度以降7年間継続しており、令和3年度ストレート卒業率も84%と、例年と変わらないレベルを維持している。

創薬科学科は、令和3年度で卒業率93%、ストレート卒業率80%となっており、過去5年間を含め卒業状況に大きな変化はない。

以上、令和3年度における修学状況データ分析結果から、現状の学生受入れ水準設定やカリキュラム編成、成績評価は、両学科ともに適正に機能していると評価した。

（3）アクティブ・ラーニングに係る「全体的傾向・特徴と課題」の自己点検・評価

本項目の自己点検・評価を行うにあたり、薬学部の開講科目におけるアクティブ・ラーニング実施状況を分析し、今後のアクティブ・ラーニング推進に向けた方策について検討した。

＜アクティブ・ラーニングに係る現状分析＞

薬学部では、「問題発見・解決能力」及び「コミュニケーション能力」の醸成を特に重要視している。これらは、薬学科（6年制）教育のコアカリキュラムとして、そして「薬剤師として求められる基本的な資質」として求められる能力であるとともに、創薬科学科（4年制）における教育研究上の目的として掲げている「高度な創薬研究者の育成」に欠かすことができない能力と位置付けられる。これらの能力の醸成において、アクティブ・ラーニングの活用は、極めて重要かつ必須な要素と捉えている。このことから、現状分析のため薬学部の開講科目におけるアクティブ・ラーニングの実施状況についてアンケート調査を行った。

アンケート対象とした令和3年度開講専門科目86科目のうち、何らかのアクティブ・ラーニング手法を取り入れた科目数は58科目（67.4%）であり、特に実習や演習、英語科目の26科目においては、その全てにおいてアクティブ・ラーニング手法が導入されていることが確認できた。一方、実習や演習、英語科目以外の講義科目60科目のうちアクティブ・ラーニング手法実施科目数は32科目（53.3%）とやや低い水準であった。そこで、実習や演習、英語科目にアクティブ・ラーニング手法がどのように取り入れられているのかを分析した。

薬学科においては4～5年次に臨床前実習や臨床実務実習（病院・薬局）を行い、自己参加型の能動的な学習ができる環境を整えている。また、薬学科4～6年次と創薬科学科4年次では、卒業研究を集中的に実施し、教員や学生間のディスカッション、各自の研究課題への主体的な取り組みを通して、すべての学生が、問題解決力やコミュニケーション力を醸成できる体制を構築している。2～3年次で実施される基礎実習科目においては、それぞれの実習の特性に応じた様々なアクティブ・ラーニング手法（SGD、グループワーク、

プレゼンテーションなど)が活用されている。

また演習科目のカリキュラムにおいても、アクティブ・ラーニング手法の活用に工夫を凝らすように努めている。1年次では、早期体験型学習として「薬学概論」と「医療学入門」を導入し、病院・薬局訪問、製薬企業訪問、研究室訪問、介護体験などにより参加型学習を実施している。3年次では、「総合薬学演習」で小グループによる調査研究とプレゼンテーションを実施し、学生にとってほぼ初めてとなるプレゼンテーションに対して、その技術の伝授に担当教員それぞれが工夫を凝らしている。

英語科目である「薬学英语」と「専門英語」では、少人数によるグループ学習を実施するアクティブ・ラーニング手法を取り入れ、担当研究室ごとにそれぞれの専門分野の英語課題に取り組ませ、学習効果を上げている。

このように、実習や演習、英語科目においては、様々なアクティブ・ラーニング手法を取り入れているが、より細やかな指導を行い、学習効果を上げるためには、さらなる教員のマンパワーと創意工夫が必要である。

また、この度の調査にてアクティブ・ラーニング手法の実施が低い水準であった講義科目においても、演習とその解答・解説による自己学習、毎回の確認テストとそれを基にした学生間のディスカッションなどを組み込み、予習復習の促進や学習モチベーションの向上に役立っている科目も多く見受けられ、これらの取組を参考に更に多くの科目にアクティブ・ラーニング手法を取り入れるよう改善が必要である。

以上のことから、薬学部においてアクティブ・ラーニングを更に効果的に活用していくために、以下の3つのポイントを挙げて実践することとした。

- (1) 授業アンケート等により、学生に評判の良いアクティブ・ラーニングの取り組み方法をピックアップし、教員の間で情報共有して自らの講義・実習で活用する。
- (2) アクティブ・ラーニングを取り入れている科目は、その具体的な手法や内容をシラバスに明記して、学生の興味を高めるようにする。
- (3) 現在53.3%となっている、講義科目のアクティブ・ラーニング実施率が向上するように、FD等を通して講義担当教員のさらなる意識改革を行う。

<令和3年度薬学部FDにおける議論について>

上記の分析結果を踏まえ、薬学部FDにてアクティブ・ラーニング推進を中心とした講義改善に向けて以下の内容について議論を行った。

- (1) アクティブ・ラーニングのメリット・デメリット
- (2) アクティブ・ラーニングの方法について
- (3) その他の講義改善について

まず、アクティブ・ラーニングのメリット・デメリットについて、メリットとして、「学習効率向上・知識の深化を通して人とディスカッションできる人材を育成することができる」点や「小テストや質問コーナーを導入することでメリハリをつけることができる」な

ど、より高度な人材の育成が可能になり、学習効率の向上につながるといった、学生にとって大きな利点となる事が挙げられた。一方、デメリットとしては、「知識修得型講義の中には、内容が多すぎて時間的余裕がない講義もある」点や「講義と実習でアクティブ・ラーニングの意味合いが違う」といったアクティブ・ラーニング自体のデメリットではなく、講義における活用方法に苦勞している旨の意見が多く見受けられた。

次に、アクティブ・ラーニングの方法としては、実習科目において「各実習テーマの最後に実験での疑問や問題を学生間で議論する」ことや「パワーポイント事前配布+穴埋め形式にし、聞くだけの講義にしないようにする」など、教員からの一方的な講演ではなく、学生の能動的学習を促すような工夫が必要であるといった意見が上がった。

最後に、その他の講義改善として、そもそも「アクティブ・ラーニングの意義を学生に意識付けする必要がある」との意見があった。アクティブ・ラーニングは就職活動にも効果的であるため、講義を通じて学生に有効性を理解させていく必要がある。

以上、アクティブ・ラーニングに係る現状分析や薬学部FDの議論を踏まえて、今後の薬学部におけるアクティブ・ラーニング推進に向けた方策について検討してきた。薬学部としてはアクティブ・ラーニングの有用性ととも、講義科目を中心にアクティブ・ラーニング手法の導入率の向上を課題として認めるに至った。今後は薬学部内の優れた取組を共有し、教員一人ひとりが創意工夫を図りながらアクティブ・ラーニングの活用を意識していくとともに、学生にとって有意義な講義となっているかを見極めていくことが必要である。

【表1-1】卒業時アンケート集計(全学・薬のみ集計)

在学時に、以下の能力等をどの程度身につけることができたと思いますか。

アンケート項目		選択肢	2021	比率
1)	課題や問題を自ら解決する能力	1	7	17.1%
		2	29	70.7%
		3	4	9.8%
		4	1	2.4%
		0 (無回答)	0	0.0%
2)	組織や社会の一員として責任を持って行動する能力	1	6	14.6%
		2	29	70.7%
		3	5	12.2%
		4	1	2.4%
		0 (無回答)	0	0.0%
3)	他者と協力し合うコミュニケーション能力	1	6	14.6%
		2	28	68.3%
		3	6	14.6%
		4	1	2.4%
		0 (無回答)	0	0.0%
4)	口頭発表, 説明, 討論などのプレゼンテーション能力	1	6	14.6%
		2	22	53.7%
		3	12	29.3%
		4	1	2.4%
		0 (無回答)	0	0.0%
5)	母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く, 話す, 読む, 書く)	1	1	2.4%
		2	13	31.7%
		3	18	43.9%
		4	9	22.0%
		0 (無回答)	0	0.0%
6)	国際的な視点で考えることや国際的な感覚	1	2	4.9%
		2	10	24.4%
		3	18	43.9%
		4	11	26.8%
		0 (無回答)	0	0.0%
7)	教養教育等による幅広い知識	1	2	4.9%
		2	22	53.7%
		3	14	34.1%
		4	3	7.3%
		0 (無回答)	0	0.0%
8)	専門教育による深い専門知識・技能	1	13	31.7%
		2	25	61.0%
		3	3	7.3%
		4	0	0.0%
		0 (無回答)	0	0.0%
9)	幅広い知識, 深い専門知識・技能の修得により, 社会で活躍できる能力	1	6	14.6%
		2	29	70.7%
		3	5	12.2%
		4	1	2.4%
		0 (無回答)	0	0.0%
10)	地域を志向する意識(富山を通して, 地域社会における諸課題を理解し, 貢献しようとする意識)	1	1	2.4%
		2	16	39.0%
		3	17	41.5%
		4	7	17.1%
		0 (無回答)	0	0.0%
11)	本学での学生生活で得られたこと, あるいは得られなかったことについて, 意見がありますか。 → 自由記述としたため別紙			

1)

2)

3)

4)

5)

6)

7)

8)

9)

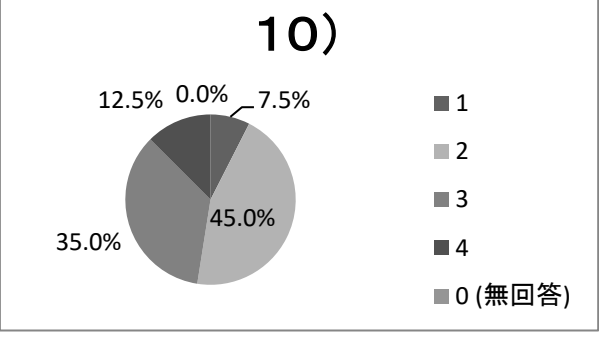
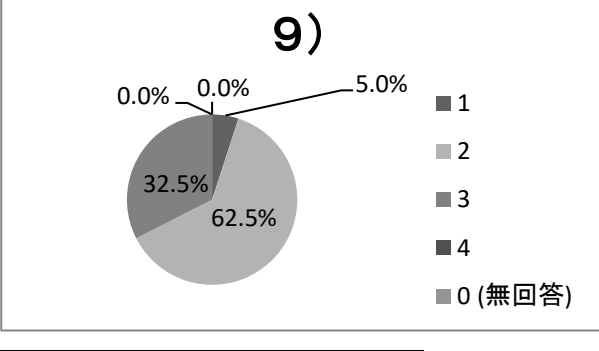
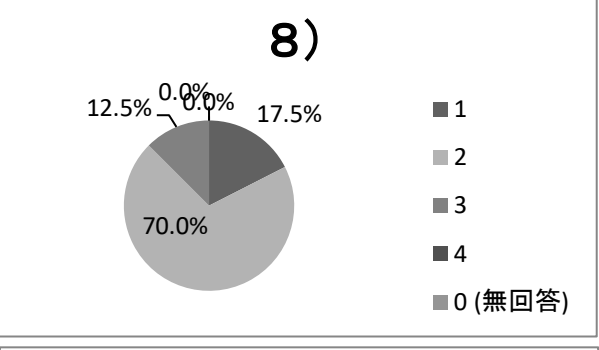
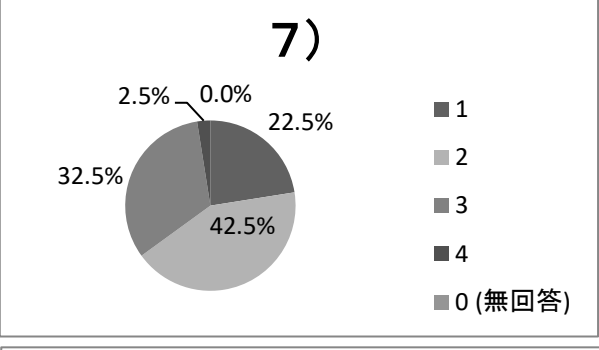
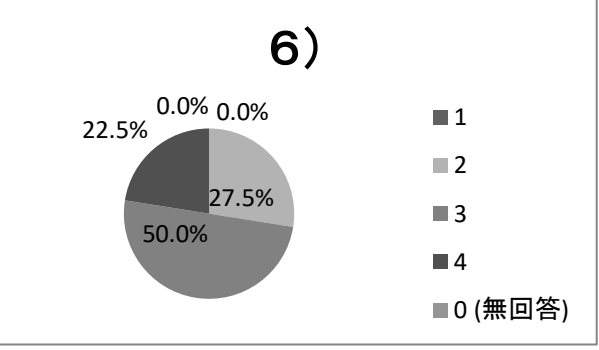
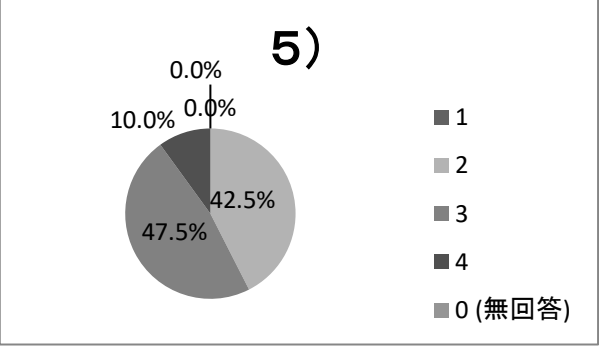
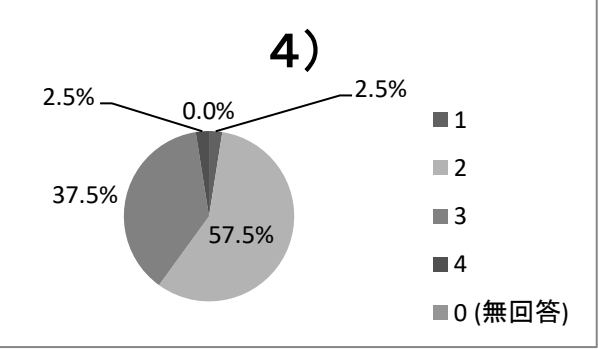
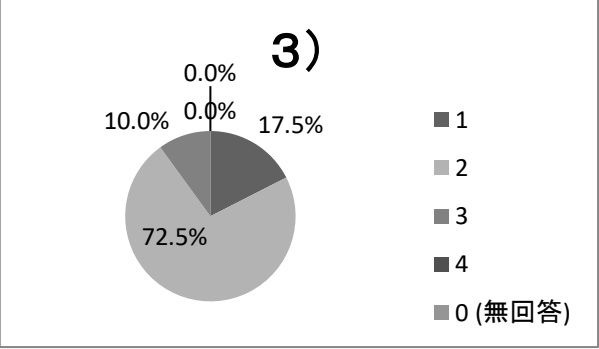
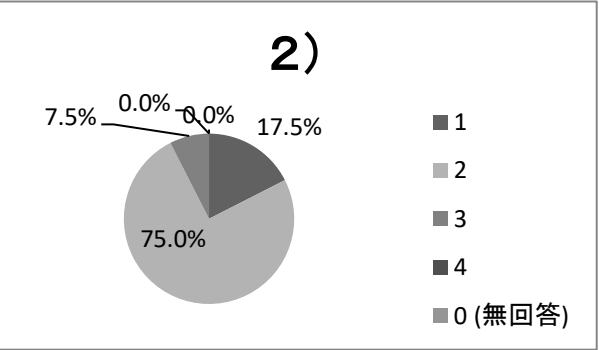
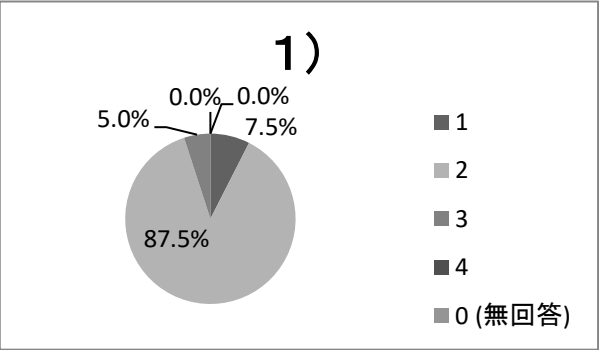
10)

1. 十分身に付けることができた 2. ある程度身に付けることができた
3. あまり身に付けることができなかった 4. 全く身に付けることができなかった

【表1-2】卒業時アンケート集計（全学・創業のみ集計）

在学時に、以下の能力等をどの程度身につけることができたと思いますか。

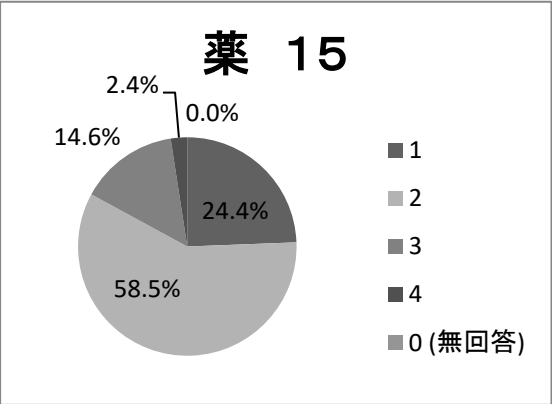
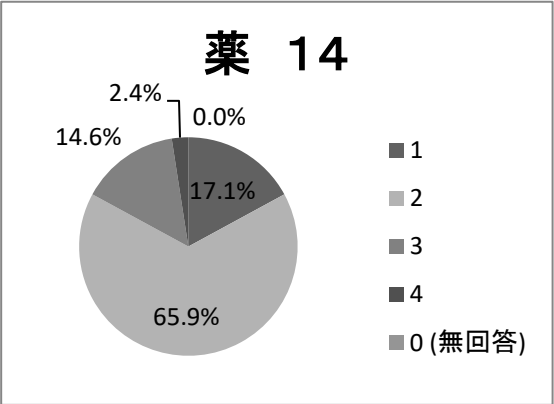
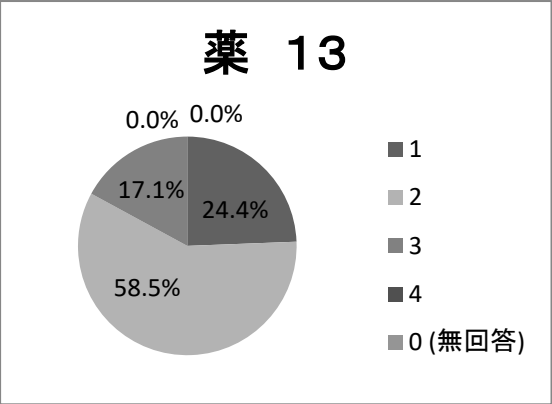
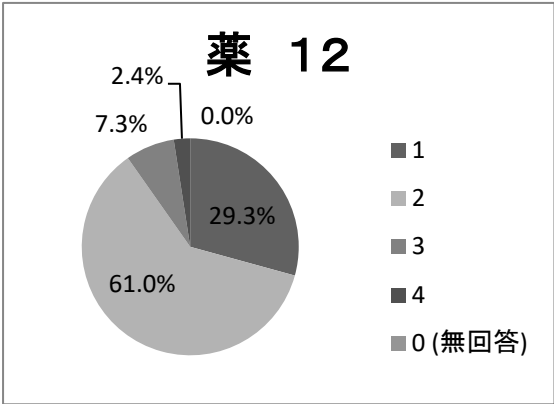
アンケート項目		選択肢	2021	比率
1)	課題や問題を自ら解決する能力	1	3	7.5%
		2	35	87.5%
		3	2	5.0%
		4	0	0.0%
		0 (無回答)	0	0.0%
2)	組織や社会の一員として責任を持って行動する能力	1	7	17.5%
		2	30	75.0%
		3	3	7.5%
		4	0	0.0%
		0 (無回答)	0	0.0%
3)	他者と協力し合うコミュニケーション能力	1	7	17.5%
		2	29	72.5%
		3	4	10.0%
		4	0	0.0%
		0 (無回答)	0	0.0%
4)	口頭発表, 説明, 討論などのプレゼンテーション能力	1	1	2.5%
		2	23	57.5%
		3	15	37.5%
		4	1	2.5%
		0 (無回答)	0	0.0%
5)	母語以外の外国語(英語など)の語学力(聞く, 話す, 読む, 書く)	1	0	0.0%
		2	17	42.5%
		3	19	47.5%
		4	4	10.0%
		0 (無回答)	0	0.0%
6)	国際的な視点で考えることや国際的な感覚	1	0	0.0%
		2	11	27.5%
		3	20	50.0%
		4	9	22.5%
		0 (無回答)	0	0.0%
7)	教養教育等による幅広い知識	1	9	22.5%
		2	17	42.5%
		3	13	32.5%
		4	1	2.5%
		0 (無回答)	0	0.0%
8)	専門教育による深い専門知識・技能	1	7	17.5%
		2	28	70.0%
		3	5	12.5%
		4	0	0.0%
		0 (無回答)	0	0.0%
9)	幅広い知識, 深い専門知識・技能の修得により, 社会で活躍できる能力	1	2	5.0%
		2	25	62.5%
		3	13	32.5%
		4	0	0.0%
		0 (無回答)	0	0.0%
10)	地域を志向する意識(富山を通して, 地域社会における諸課題を理解し, 貢献しようとする意識)	1	3	7.5%
		2	18	45.0%
		3	14	35.0%
		4	5	12.5%
		0 (無回答)	0	0.0%
11)	本学での学生生活で得られたこと, あるいは得られなかったことについて, 意見がありますか。 → 自由記述としたため別紙			



1. 十分身に付けることができた 2. ある程度身に付けることができた
3. あまり身に付けることができなかった 4. 全く身に付けることができなかった

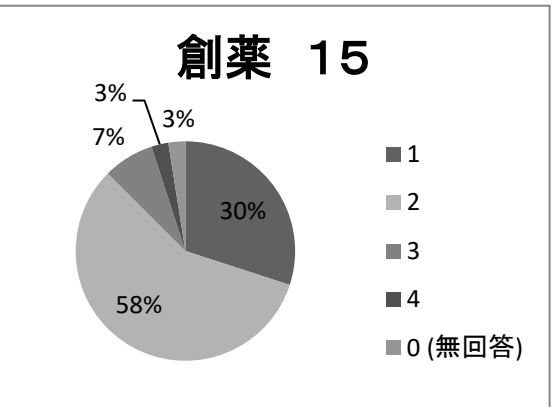
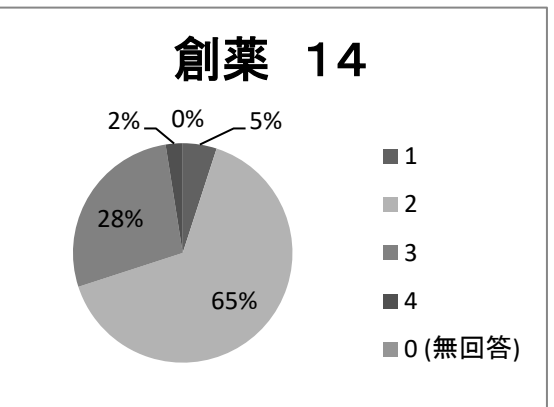
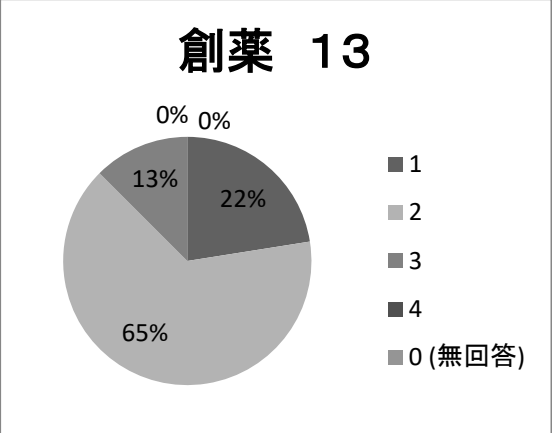
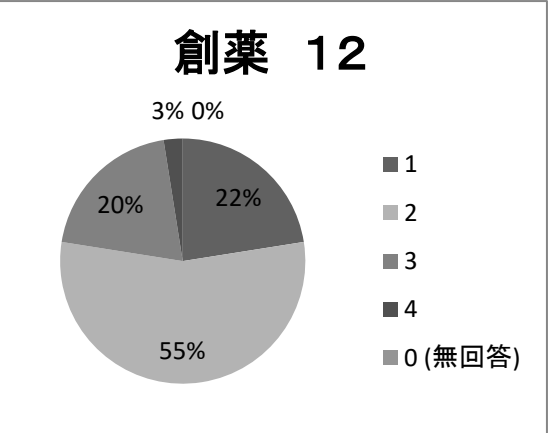
【表1-3】卒業時アンケート集計(薬学独自)

薬学科				
アンケート項目		選択肢	2021	比率
12	健康と疾患に対する洞察力を身に付けることができましたか	1	12	29.3%
		2	25	61.0%
		3	3	7.3%
		4	1	2.4%
		0 (無回答)	0	0.0%
13	薬剤師業務に関する基本的技能を身に付けることができましたか	1	10	24.4%
		2	24	58.5%
		3	7	17.1%
		4	0	0.0%
		0 (無回答)	0	0.0%
14	薬物療法の実践および公衆衛生の向上に寄与する能力を身に付けることができましたか	1	7	17.1%
		2	27	65.9%
		3	6	14.6%
		4	1	2.4%
		0 (無回答)	0	0.0%
15	本学の教育が今後の進路決定に役立ったと思いますか	1	10	24.4%
		2	24	58.5%
		3	6	14.6%
		4	1	2.4%
		0 (無回答)	0	0.0%



1. 十分身に付けることができた 2. ある程度身に付けることができた
3. あまり身に付けることができなかった 4. 全く身に付けることができなかった

創薬科学科				
アンケート項目		選択肢	2021	比率
12	自然現象に対する知的好奇心・探求心を身に付けることができましたか	1	9	22.5%
		2	22	55.0%
		3	8	20.0%
		4	1	2.5%
		0 (無回答)	0	0.0%
13	創薬科学に関する幅広い学識と実験技術等を身に付けることができましたか	1	9	22.5%
		2	26	65.0%
		3	5	12.5%
		4	0	0.0%
		0 (無回答)	0	0.0%
14	医薬品創出に取り組むために必要な創造的思考力を身に付けることができましたか	1	2	5.0%
		2	26	65.0%
		3	11	27.5%
		4	1	2.5%
		0 (無回答)	0	0.0%
15	本学の教育が今後の進路決定に役立ったと思いますか	1	12	30.0%
		2	23	57.5%
		3	3	7.5%
		4	1	2.5%
		0 (無回答)	1	2.5%



1. 十分身に付けることができた 2. ある程度身に付けることができた
3. あまり身に付けることができなかった 4. 全く身に付けることができなかった

【表2-1】R4年4月における学年別在籍状況

(薬学科)

学年		1年	2年	3年	4年	5年	6年
入学時の学生数(A)		70	58	55	59	60	57
R4年4月時の在籍学生数(B)		73	57	55	64	56	63
過年度生の数(C)	留年による者	3	2	1	7	4	13
	休学による者	0	0	1	0	0	0
転学科者の数(D)		0	0	0	0	0	0
ストレート在籍者数(E = B-C-D)		70	55	53	57	52	50
ストレート在籍率(E/A)		1.00	0.95	0.96	0.97	0.87	0.88
過年度在籍率(C/B)		0.04	0.04	0.04	0.11	0.07	0.21

(創薬科学科)

学年		1年	2年	3年	4年
入学時の学生数(A)		40	50	54	55
R4年4月時の在籍学生数(B)		47	53	53	51
過年度生の数(C)	留年による者	7	8	7	5
	休学による者	0	1	0	0
転学科者の数(D)		0	0	0	0
ストレート在籍者数(E = B-C-D)		40	44	46	46
ストレート在籍率(E/A)		1.00	0.88	0.85	0.84
過年度在籍率(C/B)		0.15	0.17	0.13	0.10

【表2-2】H27年度～R3年度における学年別進級率

(薬学科)

		H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	R元年度	R2年度	R3年度
1年次	在籍者数	59	55	58	64	61	56	60
	休学者数	0	0	2	1(但し進級)	1	0	0
	退学者数	2	1	1	0	1	0	0
	留年者数	0	1	2	2	0	2	3
	進級率	0.97	0.96	0.91	0.97	0.98	0.96	0.95
2年次	在籍者数	63	61	56	54	62	60	54
	休学者数	0	0	0	0	0	0	0
	退学者数	0	3	1	0	1	0	0
	留年者数	4	3	1	0	1	0	0
	進級率	0.94	0.90	0.96	1.00	0.97	1.00	1.00
3年次	在籍者数	57	63	59	57	56	60	65
	休学者数	1	3	0	0	0	1	0
	退学者数	1	0	1	0	0	0	1
	留年者数	3	1	3	2	0	4	1
	進級率	0.91	0.94	0.93	0.96	1.00	0.92	0.97
4年次	在籍者数	55(※)	56(※)	60	60(※)	61	65	57
	休学者数	3	1	1	3	7	1	0
	退学者数	0	0	0	1	0	1	0
	留年者数	0	0	3	3	▲4	1	1
	進級率	0.95	0.98	0.93	0.88	0.82	0.91	0.98
5年次	在籍者数	57	52	55	56	55	51	63
	休学者数	0	0	0	1	0	1	0
	退学者数	0	0	0	0	0	0	0
	留年者数	0	0	0	1	1	0	0
	進級率	1.00	1.00	1.00	0.96	0.98	0.98	1.00

※ 創薬→薬の転学科1名を含む。

▲ うち2名は年度限りで創薬へ転学科

在籍者数は当該年度始め、休学、退学、留年者数は当該年度末の数値

(創薬科学科)

		H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	R元年度	R2年度	R3年度
1年次	在籍者数	60	63	56	56	59	59	57
	休学者数	1	1	2	0	0	0	0
	退学者数	2	1	2	4	2	1	1
	留年者数	8	3	3	4	5	7	7
	進級率	0.82	0.92	0.88	0.86	0.88	0.86	0.86
2年次	在籍者数	60	53	59	56	50	56	54
	休学者数	1	1	1	0	1	0	2
	退学者数	3	0	2	2	1	2	1
	留年者数	3	0	6	2	3	3	2
	進級率	0.88	0.98	0.85	0.93	0.90	0.91	0.91
3年次	在籍者数	45	57	57	51	52	48	53
	休学者数	1	0	0	0	0	2(但し進級)	1(但し進級)
	退学者数	0	1	0	0	1	1	1
	留年者数	3	5	1	0	3	2	4
	進級率	0.91	0.89	0.98	1.00	0.92	0.94	0.91

在籍者数は当該年度始め、休学、退学、留年者数は当該年度末の数値

【表2-3】H27年度～R3年度における卒業状況

(薬学科)

		H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	R元年度	R2年度	R3年度
6年次生(年度末)の在籍学生数(A)		54	57	52	55	54	54	50
卒業者数(B)		54	57	52	55	54	54	50
卒業率(B/A)		1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
卒業までに要した年数	6年(C)	48	52	45	50	51	47	46
	7年	2	3	2	5	2	5	3
	8年	3	2	2	0	1	0	0
	9年以上	1	0	3	0	0	2	1
6年次生(C)が入学した年度の実入学者数(D)		55	57	57	59	60	56	55
ストレート卒業率(C/D)		0.87	0.91	0.79	0.85	0.85	0.84	0.84

(創薬科学科)

		H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	R元年度	R2年度	R3年度
4年次生(年度末)の在籍学生数(A)		54	40	51	57	51	49	45
卒業者数(B)		54	40	47	56	50	49	42
卒業率(B/A)		1.00	1.00	0.92	0.98	0.98	1.00	0.93
卒業までに要した年数	4年(C)	45	37	41	47	45	42	41
	5年	6	0	4	4	4	4	1
	6年	1	2	1	4	0	1	0
	7年以上	2	1	1	1	1	2	0
4年次生(C)が入学した年度の実入学者数(D)		50	51	53	54	54	52	51
ストレート卒業率(C/D)		0.90	0.73	0.77	0.87	0.83	0.81	0.80

図 1

【薬学科】卒業時アンケート（全学項目）結果推移

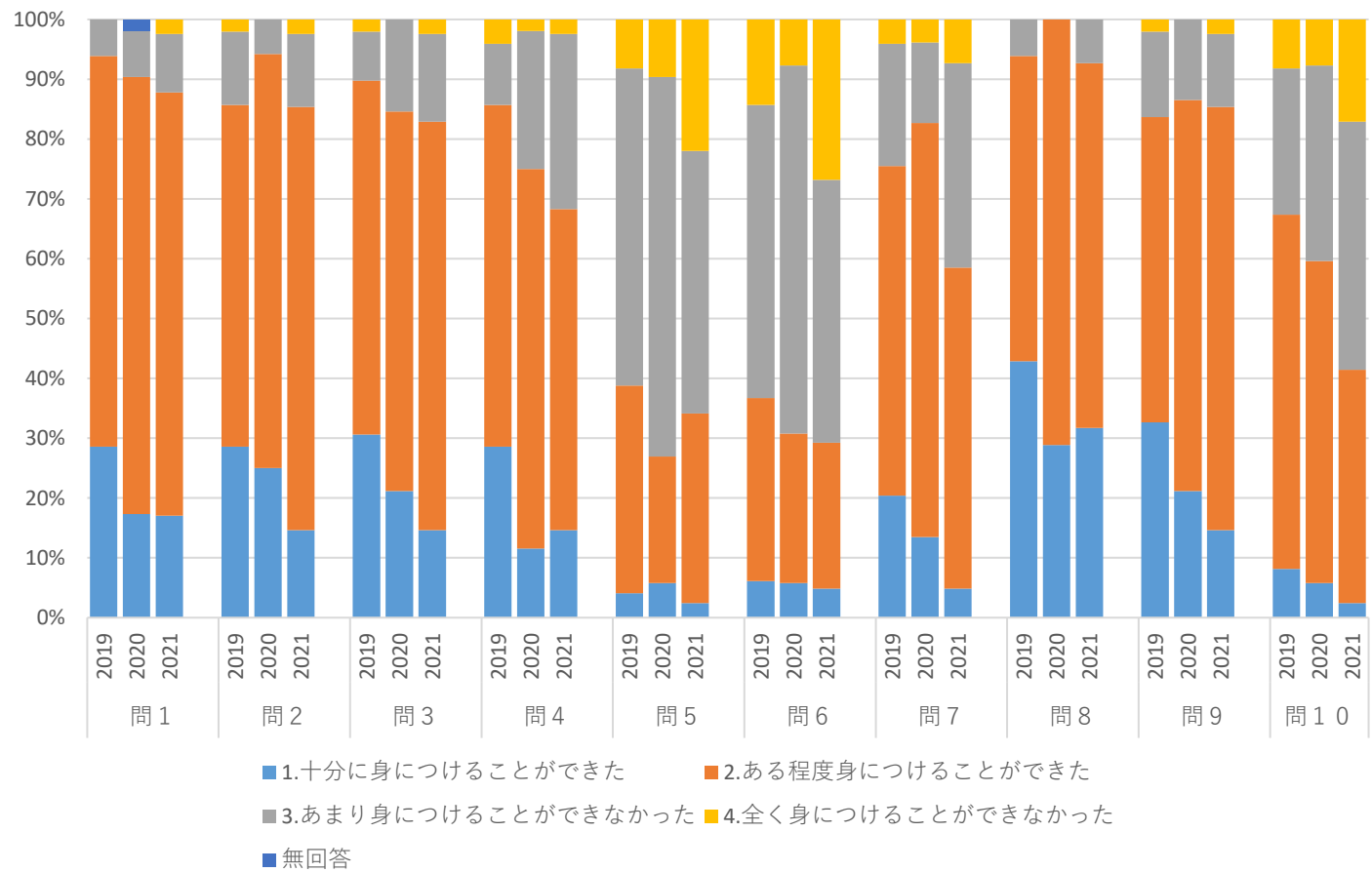


図 2

【創薬科学科】卒業時アンケート（全学項目）結果推移

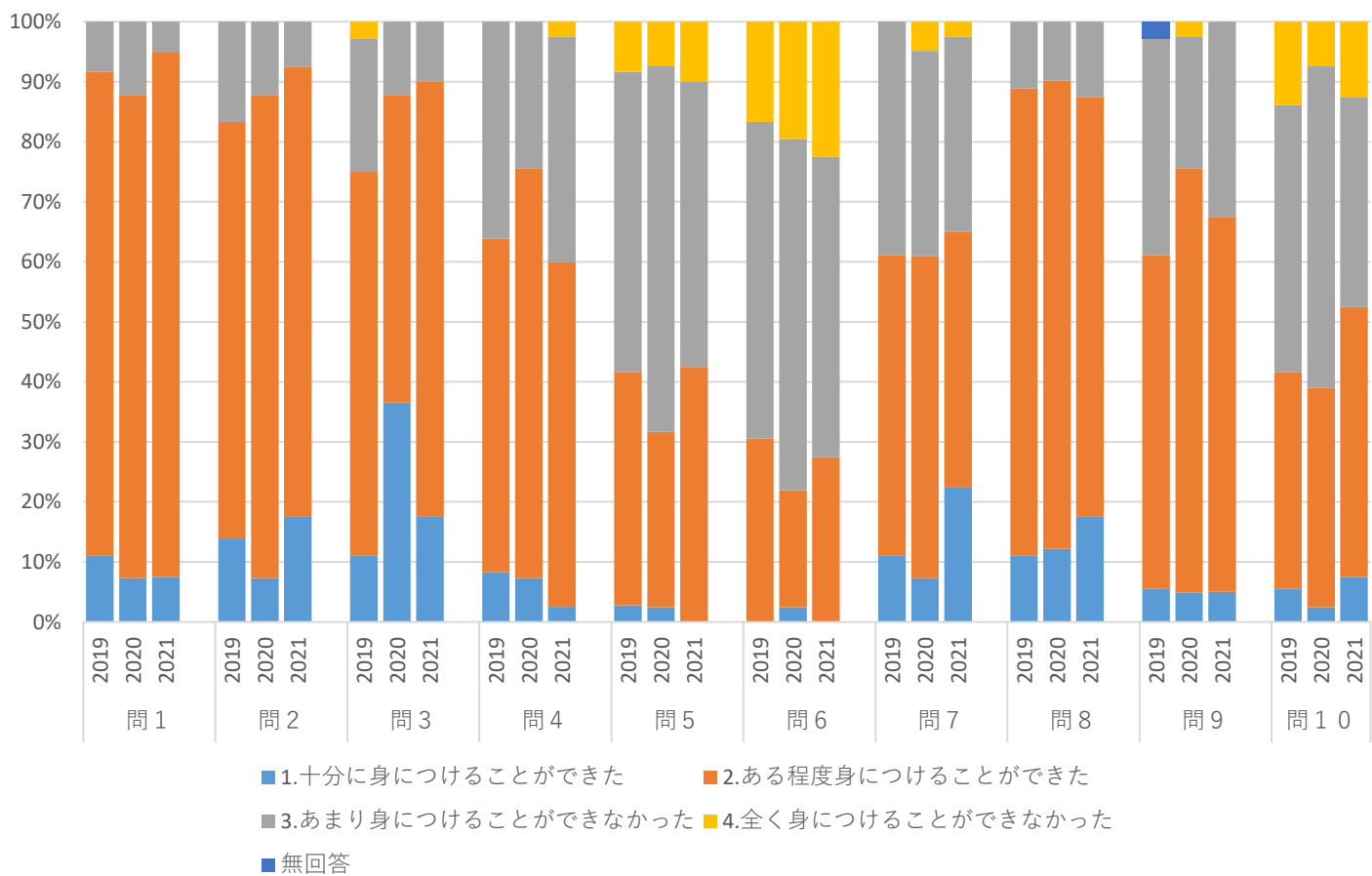


図 3

【薬学科】卒業時アンケート（独自項目）結果推移

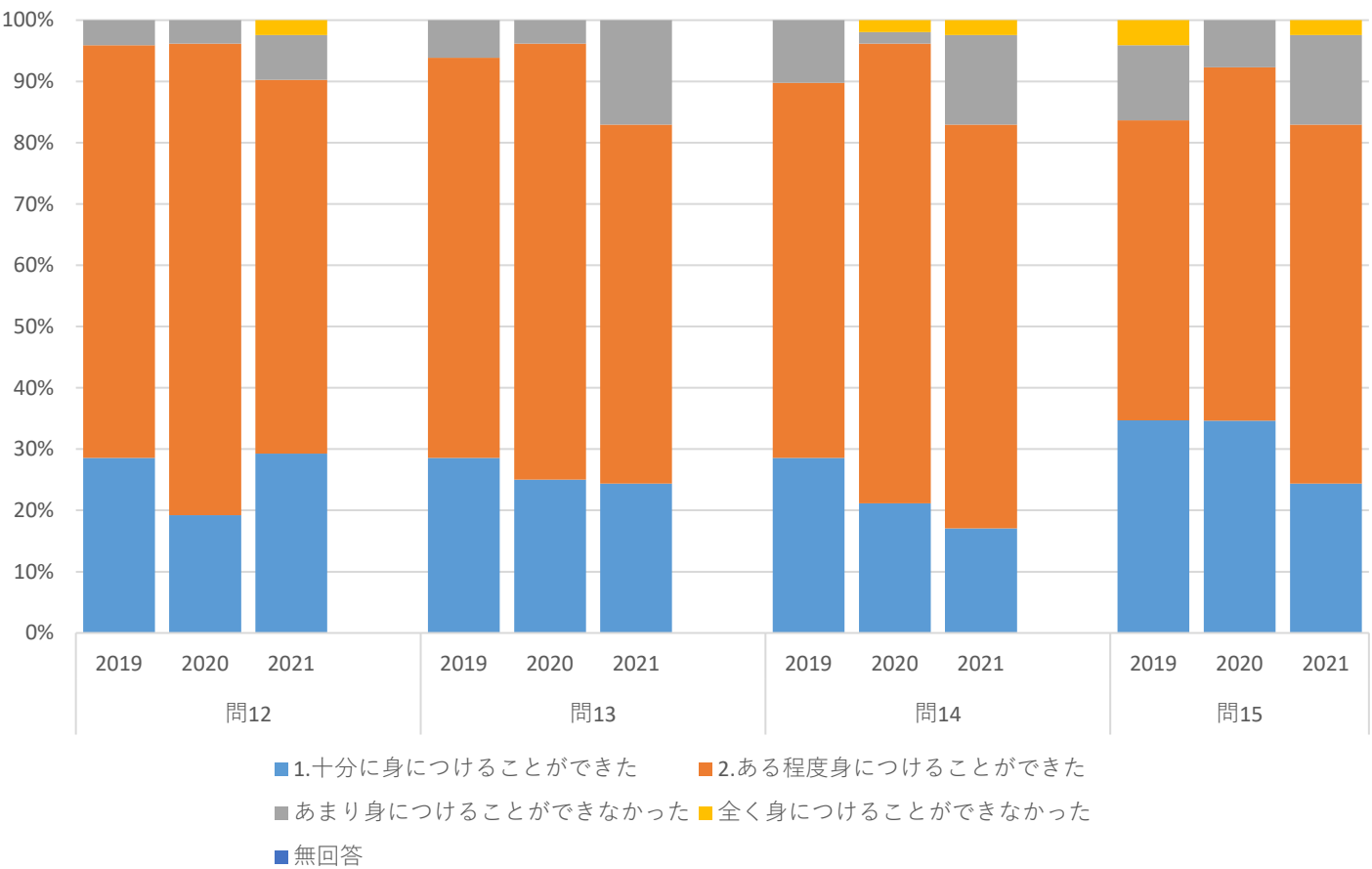


図 4

【創薬科学科】卒業時アンケート（独自項目）結果推移

